**説教20240225創世記12：1-8ヨハネ3：1-21「一人も滅びることなく」**

**イエスキリストは、世を愛されました。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るために。**

**一人も、という事は、全ての人々、更に言えば、全ての生き物という事になるでしょうか。犬も猫も、クジラも蛇をも、イエス様は愛されました。**

**それで、私たちにはそのイエス様からの愛に応答できる霊が与えられています。私たちは神を愛しそして隣人を愛することが出来るようにされているのです。イエス様が御語りになる愛は、神への愛と隣人愛とに分けられます。神への愛とは、イエス様を信じて、イエス様について行って、この世を去るときもイエス様を愛して、最後の日に、再びイエス様に顔を合わせてお会いすることになり、永遠の命を頂くという事です。**

**そして、隣人愛とは、神への愛と同じ愛をもって、隣りの人たちを愛していくという事です。この愛は具体的に深まっていく愛です。**

**私はイエス様の愛を知る者とされてから、自分の母親との接し方も変えられました。イエス様を知る前は、ただ人に対して強い思いで接すれば、それで愛が深められるのだと、勘違いをしていました。しかし、イエス様が語る隣人愛とは、そうではなくて、母親に会えていても会えていなくても、いつも心に彼女のことを覚えていて、幸いを祈り続けるという事が基礎になっています。そうすれば、又会える日が楽しみになります。この様にして、生涯にわたって深められていくのが隣人愛であります。そしてそれはこの地上での時間を超えて、最後の日における、再会の喜びにもつながってくることでしょう。**

**隣人愛は、極めて人間的な愛でもあります。昭和の時代に活躍したある作詞家は、アイドル歌手たちに次のような歌詞を提供して、歌わせていました。「I will follow you.あなたについてゆきたい。／あなたを知りたい愛の予感。」こんな歌詞に多くの人たちが心動かされたのでした。この様なの心の高ぶりも隣人愛の一つとして大切だと思います。しかし、それが一生涯を支配する愛となるならば、非常によくない結果を招くことになるということは、今の時代が証明しています。**

**イエス様はこの地上を歩かれた時に、私たちと同じ肉をまとって、一人の人間となられました。ですから、イエス様は神様ではありますが、同時に人間として、私たち一人ひとりを隣人愛をもって愛して下さいます。私たちは、もちろん、最悪の事態に陥った時には、神さまとしてのイエスキリストの愛によって救われ、十字架の死と、永遠の命への復活へと導かれます。しかし、平凡な、平和な日常の一日を過ごしている時には、隣りにいるイエス様と、隣人愛をもって応答していくということも出来るのです。隣人としてのイエス様は、何せ、私のことをすべて知っていて、私の幸せを誰よりも願っていてくれる人ですから、一緒にいてこんなに幸せな人は居ないのです。**

**又、私たちも、そう言った日々の生活で、イエス様との隣人愛による交わりを深めて行って、いざこの世を去るときにはどれだけ、イエス様と親しくなれているのか、と期待を持たされます。イエス様のことは100年付き合ったくらいでは、到底飽き足りることはありませんので、誰しも、イエス様との交わりは一生涯の楽しみになるのではないでしょうか。**

**今日のヨハネ福音書に出て来ます、ニコデモと言う人も、イエス様との隣人愛を楽しんだ一人であります。今日の聖書箇所を読む限りでは、ニコデモは、神の愛を知りません。しかし、彼の隣人愛が深くて、イエス様を隣人として深く愛していたことが読み取れます。**

**まず、聖書は「ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった」と語って、ニコデモの地位やを明記しています。私たちは、聖書を読んでいてファリサイ派と聞きますと、イエス様の命を付け狙い、最後には十字架に付けた張本人と認識して、彼らをヤバい人々と考えます。それが一つの社会通念であり、聖書はこの通念を前提として語られていきます。**

**しかし、当のイエス様は、そんな風には決して考えられません。なぜならイエス様は人間一人ひとりの心のうちをきちんとご覧になるからです。つまり、イエス様は、この人はファリサイ派に属しているからかくかくしかじか、といったレッテルを張るような見方は決してされないのです。**

**今日でいえば、この人は社会派だから、かくかくしかじかと言ったレッテル張りによる見方が、これまでは教会内でも行われてきましたが、イエス様はそのような観方ではなく、一人ひとりの心のうちをきちんとご覧になられています。隣り人としてのイエス様は、必ず、あなたの姿と心のうちを深く見定めたうえで、判断を降される御方なのです。**

**ニコデモは世慣れた人と言いますか、議員でもあり、全ての人たちとうまくやっていけるような人柄だったと思われます。人のことを見抜くのにも長けていたことでしょう。そして彼は、当時ファリサイ派の間で危険視されていた、イエス様のことも分かる人でした。彼は、イエス様のことをレッテル貼りするような人ではなく、きちんと自分の心のうちまでを見て下さる方だと分かっていたのです。それだから、ニコデモは普通のファリサイ派の人たちが決してしないような、イエス様と交わるという事をしたのでした。彼は、どうしてもイエス様に会って、自分の心のうちを聞いてもらいたかったのでしょう。**

**でも、ニコデモは或る夜に、みんなに気付かれないように、こっそりとイエス様に会いに行ったようです。３章２節に「ある夜」と記されていますので、そのように推察できます。ニコデモは、みんなの心が分っていたので、ファリサイ派の仲間たちにイエス様に会ったという事がばれるとヤバいと思ったのでした。**

**この様に黙想していきますと、ニコデモが或る夜に危険を冒して、愛するイエス様に会いに行ったという事がドラマのワンシーンの様に思い起こされます。ニコデモのイエス様に対する隣人愛、愛情はこの様に深いものがあったのでした。**

**ニコデモとイエス様の隣人愛による交わりのありさまは、聖書をよく読んで、その行間をも味わっていくうちに感じられるようになります。私自身、この聖書箇所を説教するのは確か二度目でありますが、前回説教した時よりも、ニコデモという人の人となりがよりよくわかってきました。もちろん、イエス様のこともほんの少し、よりよくわかりました。**

**イエス様も、この様にして自分に近づいて来るニコデモのことを、憎いとは思わずに好意をもって受け入れたのでした。**

**「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」このイエス様の御言葉は、多くの人を信仰へと導き、そしてイエス様を信じる信仰を強めることが出来る御言葉です。この御言葉はとても美しく、聞く者を時には酔わせもすることでしょう。**

**今、この御言葉を聞くことが出来る私たちは幸せですが、今日は、この御言葉が語られた場面を想い起して参りましょう。この御言葉は、全ての人々に対してイエス様が御語りになっている言葉ではありますが、具体的には、このニコデモという人に対してイエス様が愛情深く接している場面で語られたことであります。**

**つまりこのような愛に満ちた御言葉が語られるのには、やはり愛に満ちた場面が必要であるという事でしょう。**

**ニコデモは、ファリサイ派に属しながらも、救い主イエス様のほうに接近していきました。彼は、悪い行いをして、光よりも闇を好む人々の歩みに疑問を持ち始めています。悪を行って光であるイエス様を憎み、その行いが明るみに出るのをおそれて、更にイエス様を迫害しようとするファリサイ派の人々の歩みが、何となくおかしいなと思い始めているのです。**

**しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。**

**この21節の御言葉で、イエス様はニコデモを励ましています。ニコデモがイエス様を愛して、危険を冒しながらも、イエス様に会いに来てくれたので、イエス様は、その愛に応えて、この様に、美しい愛に満ちた御言葉を語って下さったのでした。**

**十字架の死と、永遠の命への復活という神の愛を知らなかったニコデモですが、それでも彼は隣人愛によって、次第に、イエス様に近づき、イエス様をより深く愛する者へと変えられていくようです。この様に、人によっては、神への愛よりも、隣人への愛が先だっているという方々も多くおられることと思います。とにかく、イエス様を愛しイエス様を知るという道は、イエス様によって手を引かれて入る道ですので、イエス様ご自身が、一人ひとりにあった形で、その道を導いて下さることでしょう。**

**人の心のうちは本当に人それぞれで、それを本当に見定めることが出来るのはイエス様ただ一人です。ニコデモの様にイエス様に愛情をもって近づいたファリサイ派の人は、数えるほどだったと思いますが、では、大半のファリサイ派の人々の心のうちはどうだったのでしょうか。そのことを比較するのにわかり易い箇所が聖書にはあります。それはヨハネ福音書の９章39節以下です。お読みします。新約聖書186頁になります。**

**イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」**

**イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。**

**「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。」これもイエス様の御言葉であり、私たちはこの御言葉も聞き逃すことは出来ません。しかしこの御言葉は、あまり聞くに心地よいものではないでしょう。そして今日の聖書箇所でイエス様は「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」とも御語りになっています。こちらのほうは何と私たちの耳に快く響いてくることでしょうか。**

**「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。」「神が御子を世に遣わされたのは、御子によって世が救われるためである。」この二つの御言葉は何回も聞いてよく味わっていきますと、つまるところ同じことをイエス様は言われているのだなあという事が分ってきます。私たちは、まっすぐな心でイエス様の前に立つ時、正しく裁かれ、そしてイエス様によって救われるのです。**

**それではなぜイエス様は時には「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。」という厳しめの御言葉を私たちに下さるのでしょうか。このこともイエス様がこの御言葉を語られた場面のことを思い起こしていくとわかってきます。新約聖書186頁をみますと、このとき、イエス様と目の見えない人の二人は、事情聴取をしていた多くのファリサイ派の人々に取り囲まれていました、そしてこのファリサイ派の人々に聞こえるようにイエス様は「わたしがこの世に来たのは、裁くためである」と言ったのでした。この場面には、ニコデモとの愛情深い交わりの場面とは打って変わって、苛立ちや不平不満、ぎすぎすした感情などが渦巻いている様です。そんな中で、イエス様は、聞こえよがしに「わたしがこの世に来たのは、裁くためである」と言われたのですね。こんな風にイエス様は時と場面に応じて、表現を様々に工夫しておられることが分ります。**

**パウロという人は、そんな苛立つファリサイ派の人々の中でも最たる人でしたが、その彼が「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」という復活の主イエスの声を聞き、洗礼を受けたという事は、主イエスが、どんな人でも一人も滅びることなく世の救いを祈っておられる証しであります。新しい一週間の日々もそんなイエス様と愛情深く過ごして参りましょう。**

**祈り**

**主よ、どうか私たちに神への愛、隣人への愛をお与えください。そしてそれを絶えず深めて下さい。私たちがの愛情に、ほだされるのではなく、最後まで続く愛によって、あなたが捕えて下さい。**

**世界祈祷日を覚えます。どうか戦争に直面し、忍耐を強いられている、パレスチナの人々を省みて下さい。「愛をもって互いに忍耐しなさい」というあなたの御言葉の通りに、苦しみ悲しみの内にあって愛し合う愛を深めて下さい。**

**今、パレスチナの女性が語っている言葉に、私たちが耳を傾けることが出来ますように。パレスチナに住むクリスチャンたちの隣人となる事が出来ますように。**

**テレビのニュースでは分からないことが、知らされますように。御子イエスによって、この世が一つとされ、主による平和によって、この世がつくり変えられる事を知り、キリストの体につながって、その幸せを日々味わっていく事が出来ますように。**